

私の製本

私は、ものを書いたり、これをまとめて資料や本にすることが比較的好きです。これまでにハードカバーの本を7冊ほど作ってみました(図1)。



図1 私の作った本

上記本の内容は、自分の会社生活(自分史)1冊、定年後の技術指導内容(2冊)、そして茨専ノート4冊の合計7冊です。茨専ノートは今から40年程前(1968年1月～69年3月)に小生が日立製作所茨城工業専門学校(茨専)において受講した内容をノートに纏め、これを同校研究生(東北大学受託研究員1969/4～1970/3)のときに製本したものです。初版本は背表紙に粘着テープを用いた粗末なものでしたが、これを2008年にハードカバーに再製本したものが図示した本です。

上記本は最初の3冊は総革製の表紙で、後の4冊は布製のハードカバーとしました。最初にハードカバーの本を作ったのは2003年でしたが、このときはまだ製本の知識はまったく無かったので、ホームセンターの製本器を見たりWeb上で情報を入手したりしました。この結果、各種の製本方法に対応して、いろいろな製本器や裁断機があることが判りましたが、個人が趣味として製本するのに適したものは見つかりませんでした。このため、自分でなんとか工夫して本を作ることを始めました。最初にWebから得た重要な知識は、背面を連結する接着剤は、ヒーターで暖めて接着するものでなくて、木工用接着剤が使えることが判りました。後から考えると、紙は木材の繊維から作られているので、木工用接着剤がつかえることは自然なことと思われます。木工用接着剤を使うことを想定して図2に示すような道具を作成しました。



図2は作成した製本器で紙を揃えてクランプで押し付けている状態を示します。この状態で紙の上端(本の背面)に木工用接着剤を塗りつけます。図3はクランプを外し手前側の板を倒した状態を示します。図3において、紙は左端と下端でそろえられるようになっています。また板の上部に白いテープが見られますが、これはテフロン製のテープで、木工用接着剤が製本器に接着しないようにするものです。

木工用接着剤の塗布

木工用接着剤を塗布するときの注意事項は水で適度に薄めて使用することです。簡単な話ですが、木工用接着剤を水で薄めて使用することは今年(2008年)まで知りませんでした。今年の6月～7月にかけてNHKの趣味悠々、お気に入りをとじる-やさしい製本入門という講座があって、そこで初めて知りました。市販の木工用接着剤を薄めてしまうと接着力が駄目になってしまうのではないかと考えていました。

接着剤を薄めても良いとなれば、薄めた方が流動性が良くなり紙の間に浸透してうまく付くことは容易に想像できます。しかしながら薄め過ぎたものを大量に塗布すると、接着剤が紙の間に浸透し、ページが開かなくなってしまいます。何事も適度な濃度であることが重要です。

寒冷紗

本の背を木工用接着剤で固定した後(乾燥後)この部分に寒冷紗を貼り付けて背の部分を補強します。ところが、私は寒冷紗というものがどこで売っているのか判らなかったので、ホームセンターで農業用に虫除けとして使うもの(化学繊維)を使いました。正式版とどのような差があるのかわかりませんが、接着もうまく出来たので、あとは寿命の問題だと思えます。

表紙用の台紙

革や布を貼り付ける台紙は厚さ2mm程度の紙を使いますが、表紙や背表紙の一部を凹にしてこの部分にタイトルなどを配置する場合、1mm厚の紙2枚の片方に開口部を作り、両者を接着して作成しました。この方法は一部を削り取る方法よりも優れていると思います。

表紙用布

表紙用クロスは「裏打ちされたものを使用すること」と先のNHKテキストには書いてあります。ところが私は裏打ちという意味が判りませんでした。いろいろ調べていくと、これは日本伝統の表装技術であり、布の表面に紙を貼り付ける技術のようです。裏打ちした布は掛け軸などに使用されているようです。そこで掛け軸の材料を売っているところを見ましたが、値段が高いので、これを用いることを諦めました。どこかに製本用の裏打ちされた安い布があると思われませんがそこまで調査しませんでした。

結局表紙の布は裏打ちしていない一般的なものを用いましたが、接着剤の濃度と量を適度に決めてやれば外観上の問題も無いことが判りました。この場合接着剤の量が多過ぎるとこれが表面まで浸透して染みのようになってしまいます。

表紙の溝

背表紙と表紙の間に溝を作って本の開閉がしやすいようになっています。この溝もうまないと外観上綺麗に仕上がりません。この溝の部分は台紙の無い部分ですがへらで押ように糊付けをします。私は、より確実に溝をつけるために、表紙を見返しに貼り付けた部に外形2mmの丸棒(木製)を挟み図2に示した製本器に入れて両端から押さえつけています。この方法で綺麗に溝が付きました。

ワックスペーパー

表紙と見返しを糊付けする場合などに、糊付け部以外の場所が濡れると紙にしわがよりが醜くなります。これを防ぐためにワックスペーパーと厚紙などを間に挿入します。この怠ってかつ糊の量が多かったり、糊を水で薄めすぎたりすると、本の内部にしわが出来ます。

技術の進歩

上記したような技術的な問題が徐々に解決した結果、少しずつ良い製本ができるようになった。図4は2003年製、図5は2008年製です。本の完成度が少し良くなっているのが判ります。



図4 2003年製



図5 2008年製

2008年12月